

## 流行論の知られざる名著

—クリスティアン・ガルヴェ「流行について」—

A Little-Known but Outstanding Work Concerning the Mode:

Christian Garve's "Ueber die Moden"

大塚雄太

OTSUKA Yuta

### 要旨

本稿は18世紀ドイツの思想家クリスティアン・ガルヴェ（1742-98年）の「流行論」（1792年）に焦点を当て、その先駆性と独自性を19世紀末から20世紀初頭の著名な流行理論との比較を通じて示そうとするものである。広く知られざる彼の「流行論」は、先駆的であるだけでなく、20世紀前後の流行理論の内容を包含する射程をもっていた。加えて、「流行論」は流行の原理および実態分析からモラル論へと展開するが、このモラル論の存在こそ、ガルヴェの「流行論」の独自性をなすものとして重要である。それは、ガルヴェの啓蒙思想家としてのあり方を示唆するものでもある。あくまでも社会的・人間的現実在即して流行の功罪を説く叙述は、あえて体系や理念を目指さず、思想と社会を結び付け、民衆のもとに「自ら考える」種を蒔こうとするガルヴェが採用した啓蒙の方法なのである。

### Abstract

This study addresses the concept and originality of "On the Mode" (1792), written by German Enlightenment philosopher Christian Garve, by comparing the work with a few famous theories on the mode published in the late 19th and early 20th centuries. Garve's little-known work dealing with the mode is not only pioneering but also broad in perspective relative to other famous theories on the topic. Moreover, Garve's inquiry into the mode originates from an analysis of the principle and actual social conditions into an examination of moral issues. The examination of moral issues is important as it constructs the originality of Garve's inquiry. Moreover, this indicates his role as an Enlightenment philosopher. Garve described the merits and demerits of the mode, and his description was always based on social reality, human life, and experiences. He aimed not to make his concept systematic but to sow the seeds that contribute towards enabling ordinary people to think by themselves. Garve's concept of Enlightenment was to connect philosophy and society.

キーワード

消費社会、流行、啓蒙思想、道徳哲学

Keywords

consumer society, mode, Enlightenment, moral philosophy

はじめに

流行について論じた古典的作品として名高いのは、タルド (Jean-Gabriel Tarde, 1843-1904) やヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen, 1857-1929)、ジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) といった人々の論考であろう<sup>1</sup>。タルド『模倣の法則』(1890年)、ヴェブレン『有閑階級の理論』(1899年)、ジンメル「流行」(1911年)は、いずれも20世紀前後の作品であり、第二次産業革命を経て、大衆消費文化とメディアが欧米に急速に広がろうとする時代に重なっている。それらの作品は主として、社会学あるいは経済学の分野において言及されてきたのだが、その言及の仕方はいずれも、それらの個別領域に収まりきれないものとして流行を捉えたのであった。そのことはすなわち、流行という社会的現象が社会科学的対象としてのみならず、人間の一般的問題として浮上することを示しているのであり、さらに言えば、流行がその現象面を超えて、現象を表出させる人間学的問題にまで踏み込んで論じられる可能性をつねに示唆してきたのである<sup>2</sup>。

流行論の古典的作品と言われる上記諸作品はしかし、流行論の端緒として位置づけられてよいだろうか<sup>3</sup>。この問いは、流行論が19世紀末から20世紀にかけての消費社会の萌芽とともに成立したという見方をも、改めて問い直すことにもつながる。そこで本稿が着目するのは、18世紀ドイツの哲学者クリスティアン・ガルヴェ (Christian Garve, 1742-98) の「流行について (Ueber die Moden)」(1792年、以下「流行論」と表記) である<sup>4</sup>。この著作の存在そのものによって、20世紀前後におかれてき

<sup>1</sup> 彼らの作品を古典理論に位置づけたものとして、石川弘義「流行理論の系譜 (第9章)」『講座現代の社会とコミュニケーション 5—情報と生活』(内川芳美ほか編)、東京大学出版会、1977年、198-203頁、中島純一『メディアと流行の心理 (増補改訂版)』、金子書房、2013年、53-77頁、坂井素思「贅沢消費論：ジンメルとヴェブレンの消費理論の趣味論的解釈」『放送大学研究年報』16巻、1999年、71-92頁などを参照。また、三者以外にもル・ボン (Gustave Le Bon, 1841-1931) やゾンバルト (Werner Sombart, 1863-1941) らの名が挙がることもある。たとえば、後者の『恋愛と贅沢と資本主義』(1912年)における奢侈論や、それに先行する彼の“Wirtschaft und die Mode” (1902年) などがあわせて参照されれば、流行と社会との対応関係はより克明になる。

<sup>2</sup> 中島氏は言う。「流行研究とは、すなわち人間研究にほかならない」。中島純一、前掲書、10頁。

<sup>3</sup> のちに見る「模倣」という観点について、バジヨット (Walter Bagehot, 1826-77) がタルドに先行したことについては以下を参照。大黒弘慈『模倣と権力の経済学—貨幣の価値を変えよ (思想史篇)』、岩波書店、2015年、43頁。

<sup>4</sup> 筆者はすでにガルヴェ「流行論」を以下の論考において思想史的問題として分析したが、流行論の系譜にガルヴェを位置付ける作業には未着手であった。本稿はそれをふまえ、ガルヴェによって把握された近代における消費社会の多様性と広がりとをより詳細に追跡することで、20世紀前後の流行論との実質的な対応関係を確認し、その先駆としてガルヴェを位置づけるものである。大塚雄太「クリスティアン・ガルヴェにおける人間・社会・モラル—「流行論」にみる現実の人間と通俗哲学の可能性」『社会思想史研究』第32号、2008年。池田は、ヘーゲルの近代社会分析の先駆として、ガルヴェ「流行論」を検討した。池田成一「ガ

た流行論の始点は、少なくとも一世紀ほど遡及されることになるだろう。さらに驚くべきことに彼の「流行論」には、流行論の古典的作品として位置づけられてきた上記諸作品のかなりの内容が含まれている。18世紀に姿を現していた消費社会の原像を、ガルヴェは早くも捉えていたのである。

にもかかわらず、ガルヴェの「流行論」、あるいはガルヴェという哲学者の存在に光が当てられることは、依然として少ない<sup>5</sup>。本稿は、流行論の古典的諸作品の内容を確認したうえで、ガルヴェの「流行論」にそれらとの重なりを見出す、それ以上に、「通俗哲学者」ガルヴェの独自の流行把握を表出させることに重きを置く。著名な思想家の陰に隠れ、彼らによっても言及されなかった一哲学者の存在の浮上は、流行に対する学際的接近の圏域がすでに18世紀に開かれていたことをも示すであろう。「近代」は、あらためてその意義を多角的に問い直される価値を、そして、現代を洞察しうる視座を提供する可能性を、なお有しているのである。

## 1. 流行の古典的理論——タルド、ヴェブレン、ジンメル

ガルヴェ「流行論」との対照に必要な限りで、タルド、ヴェブレン、ジンメルによる流行分析を再構成しておきたい。着目するのは、「模倣」とそれに付随するトリクルダウンに関する彼らの共通見解である。

### 1. 1. タルド『模倣の法則』——模倣と社会

社会とは何か。自明であるように見えて答えに窮するこの問いに対して、タルドは「模倣」という補助線を引くことによって、その形姿を浮上させようとする。ただし、「第二版への序文」における自身に寄せられた批判に対する彼の応答からも看取できるが、『模倣の法則』で用いられる「模倣」という語には十分な注意が払われねばならない。タルドは言う。

私が模倣と呼ぶのは、それが意図されたものであるかないか、あるいは受動的なものであるか能動的なものであるかにかかわらず、精神間で生じる写真撮影のことである。…社会とは模倣によって、あるいは反対模倣によって生み出されたさまざまな類似点を互いに提示しあっている人々の集合であると考えよう<sup>6</sup>。

---

ルヴェ『流行論』とヘーゲル市民社会論の成立』『東北哲学会年報』第9巻、1993年。

<sup>5</sup> この状況下で以下の論文集が出版された意義は大きい。ヨーロッパ特にドイツでは、ガルヴェやフェーダーら通俗哲学者の思想を見直す動きが再び始まっているように思われる。Vgl. Roth, Udo / Stiening, Gideon (Hrsg.), *Christian Garve (1742-1798): Philosoph und Philologe der Aufklärung*, Walter de Gruyter, Berlin / Boston, 2021. 同書所収の Udo Roth による論考は、ガルヴェ「流行論」に着目し、同時代的文脈のなかでその論理を再評価している。Vgl. Roth, Udo, Die »Begriffe vom Schönen und Häßlichen«, bestimmt »durch den Geschmack und durch die Mode«, in: *Christian Garve (1742-1798): Philosoph und Philologe der Aufklärung*, a.a.O., S. 347-370.

<sup>6</sup> Tarde, Jean-Gabriel, *Les lois de l'imitation : étude sociologique*, Paris, Félix Alcan, 1890. ガブリエル・タルド『模倣の法則』(池田祥英・村澤真保呂訳)、河出書房新社、2016年、12-16頁。以下、邦訳のページ数を示す。

彼の言う「模倣」とは、言語、宗教、政治、法律、産業、芸術など、実にさまざまな社会現象を幅広く対象として取り込みうる概念であり、したがって一般的に想起される、単なるコピーといった意味合いに終始するものではない。社会なる言葉の抽象性を打破し、観念論にも陥らずに社会概念を諸個人の現実に即して再構築する試み、それが『模倣の法則』という書物の基本的な性格である。おそろしく広大な射程をもつ書物であるから、本稿で着目する流行分析はそのごく一部に過ぎない。

「〔非論理的な〕模倣は人間の内部から外部へと進行する<sup>7)</sup>」。このようなタルドの記述は、模倣を単なる外面的コピーとみなす考えの問題性を示す。精神的「服従」が見かけの模倣に先行するのである。宗教に引き付けられれば、教義は儀式の普及に先行する。タルドによれば、ある人間が他者を模倣する時、あるいは、ある階級が別の階級の衣服や家具を模倣しようとする時、前者がまず写し取ろうとするものは後者の「欲求」や「精神」であり、ゆえに内面から外面へという模倣順序の逆転は起こりえない。こうした、それこそ観念的に見えてきわめて現実的な視点は、流行を追いかける人間の心性を解剖する際にも有益に作用するだろう。「内から外」への経路をたどる諸個人の模倣は、その集合たる社会において「上層から下層」への大きな流れとして出現する。タルドは言う。

ある社会組織が貴族制であろうと民主制であろうと、そこで模倣が急速に進行しているのを目にしたら、その社会では階級間の不平等が非常に激しいこと、その不平等は何らかの形をとって目に見えるものになっていることを確信できる。…ある国家が貴族主義的な構成をもっているとするれば、これ以上にわかりやすいものはない。そこでは、いたるところでつねに、貴族たちが可能な限り首長や国王、封建君主を模倣しようとする様子が見られるだろうし、平民たちもまた可能な限り貴族たちを模倣しようとする様子が見られるだろう<sup>8)</sup>。

タルドは、ボードリヤール (Henri Joseph Léon Baudrillard, 1821-1892) やサン＝シモンを引きながら、廷臣と君主、都会人と宮廷、地方と都会、貧者と富者、庶民と宮廷のあいだの模倣関係を引き出す。これらの関係において、模倣の対象となるのはすべて後者であり、前者がそこに見出すのは「威信」である。礼儀作法やしきたり、服装や習慣なども、この「威信」を基礎として上層から下層に向かって急速に浸透していく。社会的頂点に立つ上流階級が、あるいは相対的にその位置にある他国が、「模倣という滝が流れ落ちる<sup>9)</sup>」際の「社会的給水塔<sup>10)</sup>」としての役割を果たすのである。

人々が賞賛し、羨望する優位の実体は何であろうか。タルドによれば、未開時代には身体的な強さなどであったものが、時代を下るにつれて芸術的な想像力や産業上の創意などに変化した。そこに結びつくのは「財産を増やすためにふさわしい<sup>11)</sup>」という観念である。流行はこの流れに乗って拡大する。もちろん流行は、上述したように、模倣が内部から外部へと進展するから、言語や宗教あるいは法や統治といった直接に富に帰結しない社会現象にも確認することができるのだが、本稿では、

<sup>7)</sup> 同上書、281頁。

<sup>8)</sup> 同上書、302頁。

<sup>9)</sup> 同上書、306頁。

<sup>10)</sup> 同上書、306頁。

<sup>11)</sup> 同上書、318頁。

流行と産業の関係に焦点を絞ろう。

ここで、表面的にはまったく単純に見えるが、それでも歴史上重大な結果をもたらしたひとつの事実について触れておくべきだろう。——すなわち、消費の欲求は、それに対する生産の欲求にくらべてはるかに急速に模倣され、容易に広がっていくという事実である<sup>12</sup>。

新奇なものを目にした場合、人々の「消費の欲求」が高まる。しかしタルドによれば、「消費の欲求」は、新奇なものを生産しようとする欲求にはただちに結びつかない。つまり出発点は外部への依存であり、したがって具体的な現象として、たとえば国際的なものも含めた商取引が現れる。模倣の内部から外部への進行は、ここにもみられる。しかし消費と生産のあいだにタイム・ラグがあるにせよ、模倣が能動的になり、ある国民に生産欲求が生じると、彼らは独自の生産システムの構築へと向かい、やがて生産物の発信主体に転化していく。

流行は、消費と生産の規模を確実に拡大する。タルドは、「慣習」が支配的であった時代とは異なり、流行が支配する時代では、産業は「製品の質ではなくて量<sup>13</sup>」を追求すると言う。また、流行に付随する嗜好の不安定性は短期的な可変性をもたらすため、産業の発展もその影響を受けざるを得ない。建築業は紡績業よりも困難を抱える。とはいえ、模倣に支えられた流行の威力はすさまじい。その端緒が奢侈にあったとしても、流行はそこにとどまらず、やがて必需品へと手を伸ばす。それに伴って産業は必然的に大規模化し、「自発的で芸術的な側面ではなく、機械的で科学的な側面<sup>14</sup>」を進展させ、価格をも伝播させることになる<sup>15</sup>。

流行と「発明」の関係にも言及しておこう。発明は流行に先行する。蒸気機関や電報の発明に見られるように、発明は「慣習という障壁」を破壊していった。タルドは、この現象が経済と科学において顕著にみられたことを指摘している。流行の衝撃は、彼が後に見るように道徳や芸術にまで及ぶ。その影響は広範囲であると同時に、人間の心性にまで達する。タルドは言う。

反射的な美德（流行道徳）は、貴族の高度な道徳性を自分のものにしようとする下層階級の美德であり、あるいは道徳的にも反道徳的にも別の国民を見習おうとするような人々の美德…である。ようするに、それはつぎはぎだらけの倫理であり、ありふれた行動を隠すためのいいかげんな装飾であって、美德とはまったく関係のないものである<sup>16</sup>。

<sup>12</sup> 同上書、426 頁。

<sup>13</sup> 同上書、431 頁。

<sup>14</sup> 同上書、437 頁。

<sup>15</sup> タルドは言う。「価格決定にかんする論理的な規則があることは私も喜んで認める。ただし、各商品の価格が最初に決まるとき、そこで働いている規則は教条主義的な経済学者たちが主張する需要と供給の規則ではなく、それとは別の、もっと正確で完全に論理的な規則である。合理的な計算や契約にもとづいてひとたび価格はどこかで決定されると、それは流行をつうじて別の場所にも広がっていく。あるいは、決定時の条件が消滅したはるか後の時代になっても、そこで慣習によってこの価格が維持され、存続することもあるだろう」。同上書、435 頁。

<sup>16</sup> 同上書、453 頁。

## 1. 2. ヴェブレン『有閑階級の理論』——模倣とトリクルダウン

ヴェブレンによれば、有閑階級とは「ヨーロッパや日本の封建社会<sup>17)</sup>」の厳格な階級区分において、生産活動からの自由を名誉とともに享受する上位階級を指すのであった。有閑階級は、私有財産制とほぼ同時に成立するが、より厳密には「掠奪文化から金銭文化への移行<sup>18)</sup>」局面において出現する。財の獲得と蓄積の目的は、最低限の必要を大きく上回る生産性を基盤にもつ社会への発展に伴って、生存のための消費ではなくなる。ヴェブレンはそこに「他人に負けまいとする対抗心<sup>19)</sup>」を見た。彼は「財の獲得を促す支配的な誘因は、そもそもの始めから、富を得て差をつけることにあった<sup>20)</sup>」と言う。そうして富の所有は名誉を、場合によっては権力をももたらし、「自尊」の感情を満たす条件となったのであった。

その一方で、下層階級、すなわち生産的労働によって財を獲得し、それによって生計を成り立たせている階級は、それゆえに「勤勉と節約」と無縁ではありえない。「プロテスタンティズムの倫理」は、この階層においてこそ機能しうる。生産的労働との切断しえぬ関係によって規定されるのが下層勤労階級なのであり、したがって富裕な有閑階級はその関係の切断をもって、生産的労働から自由であろうとする。労働は「衍示的閑暇」の対極に位置する。「衍示的閑暇」は「非物質的<sup>21)</sup>」なものであり、それは教養や礼節に結びつき、有閑階級の象徴として社交的生活の中で多くの人間のまなざしに晒される。洗練された趣味や礼儀作法といったものは、「時間とエネルギーを労働にとられる人たちには手が届かない<sup>22)</sup>」。しかし、つねに人々の目に晒されることによって、以下のような現象が生じる。ヴェブレンは言う。

注目に値するのは、念入りに模倣し几帳面に鍛錬を積んでいけば上流の人格や作法に独特の特徴をそっくり身につけることができるため、教養ありげな階級が意図的に生み出され、しかも多くの場合これがひどくうまいことである。こうして相当数の家族や家系が、いわゆる紳士気取りをしているうちに、生まれも育ちもよい家系へと変貌を遂げた<sup>23)</sup>。

有閑階級によって消費されるものもまた、勤労階級とは異なる。「衍示的消費」は奢侈の消費であり、美的感覚による消費である。有閑階級は「世間の評判という点で社会構造の頂点<sup>24)</sup>」に位置付けられ、この頂点が「社会構造の一番下の階層にいたるまで、問答無用で強制的な影響力を持つ<sup>25)</sup>」から、「各階層に属す人々は、すぐ上の階層で流行中の生活様式を理想とし、それに近づこうと精力を注ぐ<sup>26)</sup>」

<sup>17)</sup> Veblen, Thorstein Bunde, *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study of Institutions*, Macmillan, London, 1912. ソースタイン・ヴェブレン『有閑階級の理論』(村井章子訳)、ちくま学芸文庫、2016年、49頁。以下、邦訳のページ数を示す。

<sup>18)</sup> 同上書、84頁。

<sup>19)</sup> 同上書、71頁。

<sup>20)</sup> 同上書、71頁。

<sup>21)</sup> 同上書、89頁。

<sup>22)</sup> 同上書、92頁。

<sup>23)</sup> 同上書、94頁。

<sup>24)</sup> 同上書、123頁。

<sup>25)</sup> 同上書、124頁。

<sup>26)</sup> 同上書、124頁。

のである。タルドも指摘したように、模倣は、流行のトリクルダウンを生み、仮に窮乏しても人々は、「衍示的消費」への動機を保ち続ける。「衍示的消費」は見せびらかす対象の広さ、すなわち人間関係の広範さの影響を受けるため、農村よりも都市において顕著となる。そして都市と消費社会の進展に伴って、「消費」は「閑暇」よりも重い意味をもつようになった<sup>27</sup>。ヴェブレンは言う。

言い換えれば、対面上の支出の基準は、他の見栄の張り合いと同じく、世間の評判の点ですぐ上の階層の慣習によって決まる、ということだ。したがって、階層が明確に分かれていない社会では、体面維持の条件や消費の基準はそのあいまいな階層を上へ上へと遡り、地位も財力も最も高い有閑階級の習慣によって決定づけられることになる<sup>28</sup>。

さらに、見せびらかす消費は、「衍示的浪費」へと屈折する。そこで見せびらかされるものは値段の高さであり、美の観念さえもが高価格に対応する。ヴェブレンによれば、その典型が衣装と家具である。ところが、皮肉なことに、時代が下るにつれて有閑階級が値段の高さと自身の美的感覚を切り離し、むしろ「自然」の雰囲気好むようになっていったのに対し、中・下層階級の人々は「なお、金銭価値が高いことの美を求める<sup>29</sup>」のであった。ヴェブレンは言う。「模倣に基づく好みであっても、他の基準に基づく場合と同様、真剣で本質的な判断の結果である。ただ、この場合には、真の美的価値ではなく、評判を得られるかどうかによって左右される点異なる<sup>30</sup>」。衣服は、実用性よりも流行によってその価値を測られやすい。そして人々は「安物を本能的に嫌悪する<sup>31</sup>」。この傾向は、可変性の度合いが強い大都市に強く表れる。流行は可変性を本質とし、それゆえにつねに消滅へと向かう一過性の現象であるが、人々は「浪費」を通じてそれに能動的にかかわり、自ら追従を望む。

有閑階級を軸に置いたヴェブレンの記述を辿ってくと、模倣や習慣に支えられた「流行」なる思考様式が、階級を超えて上から下へと社会全体に広がっていく構造が浮上するとともに、金銭価値の高低が、諸個人の判断基準に確固たる位置を占めるようになったことが示されている。「浪費」という言葉に彼は、われわれが想起するような否定的なトーンを響かせているわけではない。流行は、判断力と視覚を主とする感覚が交錯する現実的な人間像を照らし出すのである。

<sup>27</sup> ヴェブレンの次の指摘も重要である。「生産性の向上により、少ない労働で生計を立てられるようになると、勤労階級はあくせく働かずに楽に暮らそうという方向には向かず、もっと衍示的消費を増やす方向にエネルギーを注ぐようになる。したがって生産性が向上して労働を減らせるようになっても、いっこうに労働は減りはしない。生産高の増加分は、結局は衍示的浪費の欲求を満たすために使われることになる」。同上書、146-147頁。

<sup>28</sup> 同上書、141頁。

<sup>29</sup> 同上書、170頁。

<sup>30</sup> 同上書、176頁。

<sup>31</sup> 同上書、198頁。

### 1. 3. ジンメル「流行」——模倣と差異

人類の歴史におけるあらゆる本質的な生の形式は、…持続、統一、相等性への関心と、変化、特殊なもの、独自なものへの関心とを合一させる、特殊な様式をしめしている<sup>32</sup>。

ジンメルによれば、この対立の一方の極を支えるのが、模倣である。模倣は、「心理的遺伝」と無思考という特質をもち、諸個人を行為の創造性から解放し、「行為の責任」を他者に転嫁することによって、普遍性との融合を享受させる。流行は、「範例の模倣」であり、「社会への依存の欲求を満足させる<sup>33</sup>」。こうした分析は、タルドやヴェブレンと同様に、模倣の人間の意味を鋭く指摘するものであるが、流行は同時に「差異の欲求、分化、変化、逸脱の傾向をも満足させる<sup>34</sup>」というジンメルは、一見すると矛盾するかのような流行の二極性を捉え、重く見る。人は、他者と同じでありたいのか、異なっておりたいのか。流行は、この両方を同時に満たすのである。

より具体化しよう。ジンメルもまた流行と階級の関係を見据えている。しかし彼の考察において重要なのは、トリクルダウンとともに、流行が迅速に切り替わることを指摘する点である。流行の可変性は、タルドやヴェブレンよりもより刹那的に捉えられ、いわばトリクルダウンが始まる瞬間に、新しい流行が模索される。上流階級からそれ以外の階級に広がる流行の浸透過程におけるタイム・ラグこそ、上流階級が自身を他と区別するにあたって決定的に重要なのである。ジンメルは言う。

流行、つまり新しい流行は上流階級だけに属するものになる。下層階級が流行を習得しそれによって上流階級が定めた境界線を踏み越えると、流行によって象徴される上流階級の共属は破れ、上流階級はその流行を捨てて新しい流行に向かう。この新しい流行によって上流階級はふたたび広汎な大衆から分化し、それとともにあたらしく遊戯が始まる。なぜなら下層階級はその本性上、当然、向上につとめるのであって、これは、外的模倣がもっとも容易な流行の支配するところでもっとも速く達成できるからである<sup>35</sup>。

それゆえに、流行を支えるのは必ずしも「合目的性」ではなく、むしろ偶然であり、「醜悪」なものが流行することも十分にありうる。偶然性と可変性を核とする流行は、経済活動にも組み込まれ、生産され、金銭が流行への合流を可能にする。さらに、流行の存在と発生とは、差異あるいは外部を前提とする。したがってそれは、階級のみならず、国境をも越える。しかし流行の拡大は、「区別」や「分離」を徐々に消し去ってしまうために、やはり消滅への道程でもある。

流行に付随する変化の要因として、ジンメルは下層階級の上昇志向を指摘していたが、ヴェブレンと同様に、彼は大都市の環境的要因が流行の変化を加速させると考える。なかでも流行の生産局

<sup>32</sup> Simmel, Georg, *Die Mode*, in: *Philosophische Kultur. Gesammelte Essays*, Klinkhardt, Leipzig, 1911. ゲオルク・ジンメル「流行」(円子修平訳)『ジンメル著作集7文化の哲学』、白水社、1994年、32頁。以下、邦訳のページ数を示す。

<sup>33</sup> 同上書、33頁。

<sup>34</sup> 同上書、33頁。

<sup>35</sup> 同上書、36-37頁。



面についてジンメルは、ある品物の流行が「高価さ」あるいは「ぜいたくさ」を維持できず、いずれは安くなると言う。それは彼の見るところ、収入の少ない者の需要への対応であるのみならず、低価格によって流行がある程度社会に浸透しなければ、上流階級は「分離」と「区別」の契機を失い、新しい流行は出現しなくなるからである。ジンメルが摘出する「奇妙な円環」とは、流行の急速な交代によって、物は安くなり、物が安くなることで、流行の急速な交代に多くの消費者と生産者を巻き込んでいくという構造である。ここには産業あるいは経済の問題として、流行についてより踏み込んだ分析を行う余地がある。たとえば、刻々と変化する流行に対して、生産者は具体的にどのように対応しようとしたのか。流行は、生産者にいかなる態度をもたらしたのか。

流行に模倣を捉えることは、そこに同一化への志向を確認することを意味するが、ジンメルはそれと同じ程度に、差異や区別といった同一化とは逆の志向の存在を重視した。この二つのベクトルによって、流行は尽きせぬ活力を得る。とはいえ、差異に関して言えば、階級社会そのものが、すでに差異を内包していたのだった。差異への志向を、さまざまな身分の現実 に即してより具体的に探ることも重要であろう。

## 2. ガルヴェの「流行論」——18世紀ドイツにおける流行と人間

以下では、タルド、ヴェブレン、ジンメルの考察をふまえ、ガルヴェ「流行論」の内容を確認していこう。ところで、ガルヴェは通俗哲学者または啓蒙思想家とよばれることが多い。しかし、哲学史の系譜においても、思想史の系譜においても、彼は著名な哲学者の陰に隠れ、基本的には体系性のない傍流の思想家として長らく評価されてきた。しかし本稿は、哲学的体系性という評価軸から離れ、ガルヴェの思想に見られるさまざまな考察の集合を、近代における人間社会の多様な側面を照射するのに有効かつ必要なアプローチであったと評価する視点に立つ。彼の「流行論」は、そのひとつの成果に他ならない。

### 2. 1. 流行の基本原理

流行とは何か。ガルヴェはその始点に「模倣 (Nachahmung)」を置いた。模倣は無意識的でもあり、意識的でもある。社交する人間は、無意識のうちに接近する。ガルヴェは言う。「人間のもとに流行が存在するということは、彼らの社交性 (gesellige Natur) のひとつの結果である<sup>36</sup>」と。人間の結びつきは、親密さを増すにしたがって、同一性への傾向を強めていく。流行は善悪の領域ではなく、美醜の領域に関係する。人間は感覚に依拠し、それゆえに美醜の領域は可変的なものとなる。可変性は一時的に「画一性 (Gleichförmigkeit)」を生む。流行は、一種の「支配的意見 (herrschende Meinung)」だからである。

しかし、模倣から画一性への道はそれほど単調であろうか。ガルヴェが「模倣欲求」とともに指摘

<sup>36</sup> Garve, Christian, Ueber die Moden, in: *Versuche über verschiedene Gegenstände aus der Moral, der Literatur und dem gesellschaftlichen Leben*, Tl.1, Wilhelm Gottlieb Korn, Breslau, 1792, S. 123.

するのが、「不同 (Ungleichheit)」である。絶対的な平等のもとで、模倣欲求は駆動しない。その駆動のためには、不同が存在しなければならない。それは具体的には、美しさ、強さ、大きさ、知性、そして富や権力などが示す差異である。人間社会の不均一には、人々の注目を集める高みが存在する。この高みこそ、模倣を意識的なものにするのである。身分的区別が現存するも、諸身分の出世への道が閉ざされていないような「穏健な君主制 (gemäßigte Monarchie)」は、流行の住みかとして適しているとガルヴェは言う。

流行の可変性は、どのようにもたらされるのか。労働と休息を単調に繰り返すところでは、可変性の萌芽は乏しい。美に対する人々の関心の薄さも、可変性にはつながらない。逆に言えば、労働に創意が加味され、美の理想が追い求められるところでは、変化の波が途切れないということである。それは先述したように、流行と人間の感覚の密接な連関を意味するものでもあるが、興味深いのはガルヴェが「国民的産業」への着目によって、可変性の具体像を捉えようとしていることである。彼はそこに分業による生産物の多様化とそれに対応する人々の欲求を見たのであった。スミス『国富論』に触れ、「流行論」の出版の後に『国富論』のドイツ語訳を用意していたガルヴェは、スミスの商業社会のイメージをすでに共有していたのである。ガルヴェは言う。

人間の労働が分岐し、われわれの多種多様な欲求に必要なものの製造と造形に、まさに多くの中産階級の収益の源泉となった固有な技能と生活様式に従事するようになると、他の階級の虚栄心に役立つとする関心が、流行の変わりやすさを速めることになる<sup>37</sup>。

「労働する階級 (arbeitende Klasse)」の「発明力 (Erfindsamkeit)」に支えられ、流行は彼らの収入源を豊かにしながら、変化を重ねる。流行を享受する人間も、そして世に送り出す人間も、新しさを消費し生産する社会構造の内部に生きるのである。ただし、流行を享受する側と送り出す側は、階級の差異という現実の上に立っている。新しさは「上から降りてくる (herabsteigen)」。ガルヴェによれば、この端緒は「富者の富の見せびらかし」と「高貴な者の地位の見せびらかし」の欲望であり、身分の低い者は「虚栄心」と「高慢」によって上位者の模倣に努め、自身の身分的属性から遠ざかるようとする。

流行が上層から下層へと下降する際、あるいはそれが新しいものに切り替わる際、富者のもつ影響力は大きい。このことからガルヴェは、流行は高価なそれから安価なそれに移っていくことを指摘している。しかし重要なのは、社会に広がるさまざまな欲望の現実を見た際に、流行の生産者が照準をどこに定めるかという問題である。上流階級の欲望のあり方を知る生産者は、自身の生産物を必ずしも安価にする必要はない。したがって、流行が高値にとどまれば、模倣欲求を抑えきれない「貧しい階級」は、浪費によって貧困に陥る可能性にたえず近接する。ガルヴェはこのことを「流行の有害性のひとつ」に位置付けている。

<sup>37</sup> ebd., S. 130-131.

## 2. 2. 流行と「視覚」

流行の起源は、つねにある国の内部にあるわけではない。ガルヴェは、その国際的な転移局面をも捉える。閉鎖的圏内に変化がもたらされること、それは人々の交際と同様に他者との出会いを必要とする。では、流行の発信地となる要件は何であろうか。ガルヴェによれば、それは発明や勤勉や器用さに限られない。「面白くまた変化する空想力 (fröhliche und veränderliche Phantasie)」を「上品な人の洗練された感性」に結びつける国民、そして「軽快な機知に富み」「非常に社交的で、着想が迅速かつ実り多き」国民が、流行の発信主体となりうる。このポジションを占めたのがフランスであった。ガルヴェは言う。「フランスは、ヨーロッパにおける流行の支配をわがものとしてきた<sup>38</sup>」と。政治や戦争、あるいは学問によって築かれてきたフランスの優位は、フランス語の普及を伴いながら、彼らの衣服や社交辞令を全ヨーロッパに広めるにいたったのである<sup>39</sup>。

もちろん、フランスは流行の唯一の発信地ではない。発信源はロンドンにもある。だが、それらの優位も受信側の成熟によってやがて消失する。それは諸個人においても同じである。当初は模倣から始まった他者への追従は、諸個人を模倣にとどめてはおかない。豊かな市民層は、美しいものに対する感覚を研ぎ澄ませ、経験を蓄積することで、何が心地よく何が不快であるか、そして自分たちを飾るもの、不格好にするものについて、自分で判断するようになる。ガルヴェは言う。

洗練された礼儀作法 (Sitten) の第一歩は、他人が美しいとみなすものの模倣であり、その最後の歩みは、美しいとはっきり見極めるものの自分自身の選択である<sup>40</sup>。

ガルヴェは、流行を生活にも引き付ける。衣服や家具などは本来、生活における有用性から完全に乖離できない。それは、食事が味覚と消化能力という枠を基本的には踏み越えないことと同じである。合目的性にしがう限り、可変性は生じえない。ところが人は美しく洗練された物事によって、「他者に気に入られたい」という欲求をもつ。友人を自宅でもてなすには、装飾品で飾り立てるなど、大きな支出と努力が必要なのである。

重要なのは、美が感覚的に、なかでも「視覚」によって知覚されることである。味覚は苦みを味わうことができても、毒を取り除くことはできない。しかし視覚は、正反対の現象をも好ましいものと見なしうる。だからこそ、フランスや都会発の流行が仮に奇抜であったとしても、視覚はそれに徐々に馴染み、それを受容する。

流行は、人々の振る舞いをも規制する。ガルヴェの考察は、社交から広がる「しきたり (Gebräuche)」にまで及ぶ。さらにそれは、流行と芸術の関係までも視野に収める。しかし本稿では、衣服と流行に関する彼の見解を、もう少し具体化しよう。

衣服は、流行の典型であり、頻繁に新しいものが出現し、多くの人の目に晒される。人間は新し

<sup>38</sup> ebd., S. 138.

<sup>39</sup> ガルヴェは言語の変化にも着目している。なお、彼の「流行論」を近代ヨーロッパにおける趣味論ないし美学の展開と比較検討することも有意である。フランスについての研究として以下を参照。玉田敦子「「啓蒙」と「熱狂」：フランスにおける「趣味判断」の由来と近代性」『人文学部研究論集 (中部大学)』29 巻、2013 年、145-165 頁。

<sup>40</sup> ebd., S. 142.

いものを求める欲求をもつが、だからといって家具を簡単に変えたりはしないとガルヴェは言う。ゆえに、いわゆる耐久消費財の流行の回転は、それほど急激なものとはならない。逆に、衣服の流行の回転が速いのは、新しさを実現していること以上に、多くの人間の「継続的な観察対象 (beständiger Gegenstand der Beobachtung)」であることによる。ガルヴェは、流行への「視覚」の強力な作用を見ていた。それによって人々は、模倣欲求を容易に駆動させるのであった。街頭は、富裕層と上流階級の見せびらかしによって、衣服や装飾品のショーケースと化している。視覚、模倣欲求、上位層が身につける新作、これらを見事につなぐ衣服の流行は、身分の高低を問わず、全社会的な波及力を有するのである。

それに比べて行為としきたりの流行は、ゆるやかな下降を辿る。というのも、上流階級の行為やしきたりは階級という高い壁の内部にとどまり、その他の階級が日常的に目にできるものではないからである。ヨーロッパの首都において、富裕な市民階級は衣服や家財の面では貴族と大差ないが、礼儀作法においてはなお大きく異なるとガルヴェは言う。だからこそ彼は、とめどない模倣欲求に駆られる「流行中毒 (Modesucht)」への警告を、ほかならぬ市民階級に向けて発したのであった。それには、大金が費やされるからである。

### 2. 3. 階級的制約と流行普及のダイナミズム

流行は、人間社会のさまざまな部分と関連をもつ。その接点は、想像以上に広範に存在する。ガルヴェは言う。

流行が人間本性の観察者に、彼の研究に資するいまひとつより重要な主題を提供する視点が存在する。疑いなくこの性質それ自体は、それが全人類の歴史の中に現れるように、静止しているのではなく、進歩するものである。明らかに、人間なるものより重要な事柄のなかに、政治と道徳のなかに、学芸のなかに、装飾や気晴らしにおけるような、まさに不断の変化が起こっている。…まさに総じて人間本性の特性は、国家体制、文学、そして道徳的な振る舞いにおける変化に決定的な役割を果たし、改革をあるところでは速め、あるところでは抑制する地域的・国民的相違はまた、その歩みと、ある時には迅速である時には緩慢な流行の変化に影響を及ぼす<sup>41</sup>。

地域的・国民的特性が流行に及ぼす影響で肝心なのは、社交的生活の浸透具合の差である。ガルヴェによれば、大部分の人々は、自分が自由であると思っている場合にも、少数の人間に支配されている。これまで見てきたように、流行の伝播は、少数から多数へと広がる。「全国民、全社会が同時に同一の考えを思いつくことは断じてない<sup>42</sup>」。模倣の手本は、当初は絶対的に少数なのである。したがって社交が断絶していれば、手本は手本たりえず、習慣の支配により、変化の導火線には火がつかない。ところがこの社交もまた、階級という壁を容易には乗り越えられない。社交なる人間的交流は、上流階級界に見られるだけで、それ以外の一般人のところからは消えてしまっている

<sup>41</sup> ebd., S. 182-183.

<sup>42</sup> ebd., S. 185.

ガルヴェは言う。宮廷、領主、地方貴族、商人、地方の手工業者と身分を下るにつれ、社交から得られる情報量あるいは外部との接点はより強い制約を受ける。日雇い労働者や賤民にいたっては、外部を知らない。模倣対象あるいは自身を相対化する視点を、彼らはそもそも持ちえないのである。階級間に見られる制約は、裏を返せば、下層ほど虚栄心が大きくなりやすいということを意味する。異国の礼儀作法や流行に関する知識量が階級の区別を示唆するのであるから、人はそうした知識の獲得によって、自身が属する身分から自身を分離できると考えるのである。

少数から多数へと拡大する流行のダイナミズムは、どのようにして生じるのであろうか。流行は、「支配的意見」である。この「支配的意見」は、あたかも討議の際に見られるように、賛成と反対意見のぶつかり合いによって形成される。新しさは、ただそうであるだけで人々に求められ受け入れられるわけではない。流行の萌芽が直面するのは、多数の「反対派 (Oppositionspartey)」なのである。しかし、「物事は議論される<sup>43</sup>」。この過程において、流行の新しさが検討され、受容され始めるのである。ガルヴェは、流行が当初、反対されればされるほど、急速に広がっていくという逆説を見抜いていた。意見の対立が生み出すダイナミズムは、人々の関心を広く呼び起こす効果をもつ。逆に言えば、意見の多様性を圧殺するような社会に、流行は存在することはできない。異質なものと変化を許容するためには、それらを経験する必要がある。流行はそうした経験の端緒となることによって、社会と人間に「寛容 (Toleranz)」をもたらさるのである。

## 2. 4. 流行とモラル

流行と人間の関係について、ガルヴェはモラルの観点からも考察を深める。このモラルに関する記述分量は他に比して大きい。彼の「流行論」は、流行が引き起こす社会現象の分析に徹したのではなく、流行とモラルという枠組みの挿入によって、啓蒙的機能が与えられるのである。「流行論」はなぜ、上述のように、さまざまな論点に拡散していくのか。そこには確かに体系性はない。しかし、流行と現実社会の接点を余すところなく拾い上げ、それをモラルの観点からも問い直そうとする態度は、ガルヴェの思想家としての社会的態度、すなわち自身の思想を現実社会に定位させ、知識人ではなく民衆のもとに自分自身で考える種を蒔こうとする啓蒙思想家としての意識に由来するものと考えられる。流行とモラルに関する考察は、「流行論」という作品の、さらにはガルヴェという思想家の性格を把握するうえで、きわめて重要な箇所であることを指摘しておきたい。

ガルヴェは、有用性と害悪という観点から流行とモラルの関係を問う。彼は、あくまでも流行の両面性を把握しようとするのであって、流行を断罪しようとするのではない。

どの人も、自身がなすことのすべてを自身の判断に従って行うほど、より完全な人間であるということはない。したがって、流行の支配が広がるほど、それは人間の自己判断を制限し、選択、自由、そして道徳性 (Moralität) というものが彼の行為にほとんど見られなくなる<sup>44</sup>。

<sup>43</sup> ebd., S. 195.

<sup>44</sup> ebd., S. 215.

流行への追従のための模倣が判断力の縮小を招くという上の見解は、流行のネガティブな側面に着目したものである。ただし、これまでのガルヴェの流行の捉え方に立ち返れば、彼がそのネガティブな側面に固執するとは考えにくい。人は、多くのことに同時に注意を払うことはできない。したがって、熟考を要す重要な案件をいくつも抱える人間にとって、習慣の介入は負担を軽減することにつながる。ガルヴェは、流行をある種の原則として承認することによって、知性と判断力を別のところに差し向けることができるようになるというのである。

とはいえ、判断力縮小のダメージは小さくない。最新を追いかけるだけでなく、流行というだけで手放しの称賛を与える傾向が諸個人に生まれる。ガルヴェは、つねに「支配的意見」に追従しようとすることに對し、「薄弱な精神」「弱さ」「卑小さ」という言葉によって厳しいトーンを響かせている。それは「軽率 (Frivolität)」や「軽薄 (Leichtsinn)」へと至るためである。こうした精神的傾向は、現実の破綻をも生む。そして破綻は、中間層以下を襲う。そのことは、上述の通り、すでにガルヴェ自身が指摘していた。繰り返しはやや冗長な印象を与えるが、それだけに、中間層以下の経済的困難の可能性を、「流行論」の読者は強く、そして現実的に意識する。流行の決定権は、富裕層にあるのだった。彼らが新しいものを探し求める時、「富の見せびらかし」に終始することが多分にある。そうして流行は高価を維持し、安価で良質なものの流行を排除してしまう。破滅は、この渦中で見栄を張ろうとする庶民にやってくるのである。ガルヴェは言う。

自身と自身の家の装飾を繰り返し新しくしうる富者と、一度購入したものでしばらくは何とかやりくりしなければならぬような、それほど裕福ではない者の隔たりは、両者が出会ったときにすぐに目につくものである。だから、ある者の妬みがつり、またある者は自身の自尊心が傷つけられたように思う。そして彼らの間の疎隔はより大きくなる。あるいは、貧しい人が誤った羞恥心のために思慮深さ (Klugheit) と儉約 (Sparsamkeit) を犠牲にするなら、そして自身の持ち物でまだ使えるものを、それが流行遅れになる際に頻繁に取り換えようとするなら、想像上の不幸を取り除こうとして、本当の困窮を招来する<sup>45</sup>。

ところがガルヴェは、流行に付随する奢侈を一概に悪と見なさない。奢侈の追求は、他者に自身を誇示することにつながっている。だが、問題は奢侈の中身である。たんに貴金属を並べ立ててありがたがるだけのような「粗野な民族や野蛮な時代」の奢侈とは異なって、変化に富む芸術作品や次々と生み出される手工業者の製品からなる近代的奢侈によって人は、とりわけ富者は、自身の感性と欲望を洗練させ、美しさとは何か、心地よさとは何かを考える。このことが結果として「芸術的感性 (Kunstgefühl)」や「精神的文化 (Geisteskultur)」の醸成へとつながっていくとガルヴェは言うのである。彼は近代社会から奢侈を追放しようとはしていない。

先に見たようにガルヴェは、諸個人における判断力の縮小を問題視したが、内面的問題としてより深刻なのは、人間の欲望のあり方である。「流行は、欲望を刺激する物を驚くほど複製する<sup>46</sup>」。そし

<sup>45</sup> ebd., S. 220.

<sup>46</sup> ebd., S. 228.

てその数たるや「際限がない」。生活から落ち着きが消え、迅速に更新される流行を、人は日々せわしなく追いかける。ガルヴェの記述は現実的である。たとえば、今日最善を尽くして客のもてなしの準備作業を終えた者が、明日には自分より富裕で高貴な者の家でよりよい型を知りかねない。彼の栄華は、一瞬にして、台無しになるのである。それを埋め合わせるのに、出費を重ねる。流行が潰れない限り、この円環も際限がない。しかし本来、社交の楽しみは、その家がどのように装飾されているかということとあまり関係がないはずである。人間的交流の場が、嫉妬と自惚れの場に変質していることを、ガルヴェは憂慮している。彼は言う。「虚栄心あるところ、苦悩と不安あり<sup>47</sup>」。こうしてガルヴェは再度、中間階級にはっきりと警告を与える。

流行への傾斜が害になるのは、そしてその奢侈が人間の幸福と平穩に非常に危険なものとなるのは、中間もしくは上層の市民階級の他にない<sup>48</sup>。

上流階級に接近する上位の市民身分は、奢侈や装飾品とともに、礼儀作法の模倣に努めなければならぬ。当初の両者のギャップは、市民身分のこの努力によって徐々に埋められるが、それは流行への盲目的追従と多額の出費によるものでもある。彼らのもとから「徳 (Tugend)」と「豊かさ」は同時に失われうる。

中間的市民身分の零落への道は、より短い。ガルヴェによれば、この身分の大部分は、生計を立てるための仕事に時間を費やさねばならず、享樂に没頭する余裕をもたない。彼らは、上流身分の洗練された社交の世界や生活様式について思いを巡らせることもできない。市民身分の礼儀作法と、高貴な世界の流行的礼儀作法とは、したがって異ならざるを得ない。彼らがこの状況に不満を抱き、流行を目指そうとすれば、なすべき仕事から逃れ、「軽薄さ」と奢侈に身をささげる。浪費を思いとどまることができれば、奢侈は必ずしも有害に作用しない。それは精神を陶冶するのだった。だが、それは容易ではない。ガルヴェは言う。

中間層の人は、労働と交際 (Gesellschaft) に自身の時間を分けなければならない。さもなければ、無作法で礼儀に欠けた人々との交際も甘受しなければならない。彼の階級は、上品な仲間の大きな集団をなすために、十分に裕福でよく躰けられた無為に日を送る人を提供しない。だから彼がつねに流行の楽しみのもとに生きようとするれば、無思慮な人、浪費家、彼の身分あるいは上流階級のだらしのない人とともに彼の交際に引き入れなければならない。——そうして彼は自身の外見を輝かしいものにしようとして、彼の内面、彼の頭脳、彼の心を悪化させていくのである<sup>49</sup>。

市民階級が抱える上の困難の基礎には、「貨幣愛好」と「富の高評価」という人々の価値観が見出される。富は流行を享受するための条件であった。流行は人間の心性において、富と幸福、富と名誉を結び付けるにいたったのである。流行は、富を「可視化」する。富の所有者は名声を得るた

<sup>47</sup> ebd., S. 237.

<sup>48</sup> ebd., S. 239.

<sup>49</sup> ebd., S. 243-244.

めに、「貨幣愛好」の態度を強化していく。重要なのは、「貨幣愛好」の態度は、貨幣の蓄積を目的としていない点である。つねに消費される流行、ここにガルヴェの時代、すなわち近代社会に特有の時代像が出現する。アダム・スミスは近代社会に、「徳への道」と「財産への道」を同時に歩みうる人間を想像した。ガルヴェが描写する流行の功罪からも、人は同様の人間像を抽出することができるだろう。「流行の法典は、名誉の法典とともに全ヨーロッパ共通の原則である<sup>50</sup>」状況下で、人々にガルヴェが与えるモラルへの処方箋は、はたして何であろうか。ガルヴェも問う。

道徳主義者 (Moralist) は、同時に優れた才能と独創力を、礼儀作法の簡素さと欲望の節度とともにもつ民衆の理想像を構想することができる。——その民衆は、本当の必要と有用な活動に関するあらゆることにおいて、新しくよりよい方法を絶えず考案し、たんなるアクセサリーであるようなもの、そしてまた高価であることによって気に入られるようなものにおいて不変性と素朴さとを愛するのである。——自身の安逸と美しいものへの満足や道徳感情 (moralische Empfindungen) に起因する感覚的享楽に対する十分な敏感さを持ちながらも、その両方のためにたくさん働き、試み、考案する民衆の理想像。…しかし、こうした理想像を現実化するために、彼は何をなしているのか<sup>51</sup>。

ガルヴェによれば、道徳性の向上は結局のところ、道徳主義者の仕事ではない。それは諸個人自らの自己認識と努力による。諸個人は、速すぎも遅すぎもせず、そして古臭さに無頓着になりもせず、それに固執もせず、さりとして新しさに眩惑されることもなく、流行の変化についていくのが望ましい<sup>52</sup>。ガルヴェは、近代社会に躍動する流行を認め、その存在を決して否定しない。だからこそ彼は、流行に翻弄される可能性をあらゆる者に見る。それは「愚か者」に特有の可能性ではない。というよりも、ガルヴェの認識に際立つのは、人間の精神が愚かさによって、逆に理性によって、全面的に支配されることなどないということである。そのような社会と人間の現実を受け止め、ガルヴェが提出した処方箋は、「新旧の流行の中庸を保つ<sup>53</sup>」ことであり、それは具体的には「自身が属する身分の流行を踏み越えない<sup>54</sup>」というものであった。人間本性の一般的な弱さを免れない人間は、時に思い誤る。彼らはまさに、スミス『道徳感情論』における貧しい人の息子の物語の主人公のように、上流身分にはより多くの幸福が存在すると信じ、自身もそこに身をおきたいと願う。ガルヴェはそのこと自体は「間違っ

てはいない」と擁護する。

だが彼は、アクセサリーや奢侈の模倣によって高位の階級にたやすく移行できると思う者は「愚か

<sup>50</sup> ebd., S. 249.

<sup>51</sup> ebd., S. 250.

<sup>52</sup> ただしガルヴェは、装いの古風さや無趣味さといった世間とのずれを全面的に否定しているわけではない。むしろそれを許容する必要性を力説する。というのも、装いからは判断できない独創性の芽があるかもしれないからである。社会は変人と見られようとも独創の才を有する可能性を排除してはならない。ちなみに、風変りの典型としてガルヴェが挙げるのは学者 (Gelehrte) である。しかし、世間との断絶を想起させる学者のイメージは、ガルヴェの時代には変化してきており、彼によれば、学者と世間とのつながり、さらに言えば世間と世間との関係はより密接になっている。この認識は、近代ヨーロッパにおける社会経済分析の諸成果にガルヴェが通じていたことにもよるだろう。Vgl., ebd., S. 259-264.

<sup>53</sup> ebd., S. 272.

<sup>54</sup> ebd., S. 272. この部分は原文でも強調されている。



者」であると警告する。そうした考え方は、妬みや高慢と手を結ぶからである。加えて、自分自身にない輝きを纏おうとすることは、取るに足らぬことであり、軽蔑に値する。それは自身を偽ることにつながるからである。社会的慣習についても、もっとも良質なものと考えられる上流階級の礼儀作法を知り、それを模倣しようとするのは、各階級の「理性的で洗練された人」にとっては当然なこととされるが、同じものをあらゆる仲間のところを持つてくることには十分な注意が必要となる。というのも、多くの慣習や礼儀作法に適応することができるのは格別な長所であって、誰にでも可能なことではないからである。ガルヴェは言う。

自分の周りのあらゆるものを、美しくまた輝かしくすることができない普通の人（Mittelmann）は、自身の家計と自身の生活様式のさまざまな部分間の調和を生み出すことに二重に注意深くなければならぬ。——彼が特別何も飾らないなら、したがってまた彼の持ち物の新しさの輝きを避けようとするなら、そしてそれらの汚れや放置の汚点をきれいにすれば、彼はそれをまずもって達成する<sup>55</sup>。

「流行論」の最終部でもガルヴェは、流行に彩られた近代社会を生きる諸個人の現実を受けとめる。「あらゆる愚行の中で、支配的な流行に参加するために犯す愚行よりもこの容赦に値するものはないかもしれない<sup>56</sup>」。上に見たような種々の警告も、結局のところ彼の寛容に包摂されるのである。それは確かに、「未成年状態」を告発するカントに比べれば、中途半端な印象を与えるかもしれない。しかし思想は、知識人のためだけにあるのではない。ガルヴェが時に煩わしいほどに細部にこだわるのは、社会的現実の克明な描写こそ、民衆諸個人の思考に対応すると考えたからであろう。彼らが「未成年状態」を断罪されたところで、思考や行為の規準を得たことにはならない。「流行論」の叙述そのものが、啓蒙はどうあるべきかという問いに対する、ガルヴェの回答であるように思われる。

彼は言う。流行の支配から完全に逃れること、それは「世間」に生きようとする者には「不可能」であると。「つねに古きものところに留まろうとすること<sup>57</sup>」は、「人間の自然、少なくとも、繁栄する産業と広がる社交的交流の時代のなかにいる人間の自然に反する<sup>58</sup>」。流行のダイナミズムは「円環運動（Kleislauf）」であり、人は真実や美から遠ざかりもすれば、それに接近しもする。ガルヴェの言葉で考察を閉じよう。

理性は習慣よりも尊い立法者である。そして善の認識は、模倣欲求よりもより高次の原理である。この理性はしかし私に教える。私があるなか人間として、市民として、父として、夫として、国の役人として、富める者あるいは貧しき者としてある、重要かつ持続的な境遇とこの境遇によって自身の務めである義務を、交際にだけ関係する表面的な結びつきや私がただ好ましい仲間として守らなければならない些細な義務よりも、優先させることを。それから、流行が規制することのすべては、社会における喜びと社交的な楽しみの安心と増加に関連があるに過ぎない。これに対して、流行り

<sup>55</sup> ebd., S. 286-287.

<sup>56</sup> ebd., S. 287.

<sup>57</sup> ebd., S. 289.

<sup>58</sup> ebd., S. 289.

の奢侈を抑え、流行の変化への追従状態でわれわれに節度を保つことを指示することのすべては、徳と幸福に関連があり、それは、名誉と家族の幸福の維持のために必要不可欠なものである。間接的にはそれは、国家の繁栄にとっても重要なものになる<sup>59</sup>。

## おわりに

ガルヴェの「流行論」を辿ってくと、タルドら三者は、実はガルヴェから着想を得ていたのではないかと思えてくる。本稿では、彼らがガルヴェを読んでいたかどうかについて厳密に検証することはできなかった。とはいえ、彼らとガルヴェの重なりは、あまりに大きい。流行論の系譜を遡り、ガルヴェに端緒を見ることは十分に可能であろう。その意味でも、ガルヴェの「流行論」は各方面からもっと着目されてよいように思われる。

重なりが大きいという以上に、ガルヴェの「流行論」は、上の三者の射程を上回る特徴をもっている。それは、いわば「流行論」という作品が備えた社会的・啓蒙的役割である。それはたんなる学術的作品ではないのであるし、知識人の世界のみを視野にしているわけでもない。ガルヴェが流行を人間のモラルと結びつけ、とりわけ中間層以下に向けて警告的メッセージを発していることは、やはり見逃されてはならない。「通俗哲学者」ガルヴェの啓蒙の手法を、哲学的系譜において評価することの限界が、ここに存在する。

本稿は「流行論」に着目したが、ガルヴェの思想を社会的現実との接点においてより具体化し、その思想史的意義を浮上させるには、彼の別の論考にも光を当てる必要があるであろう。「流行論」の枠組みに含まれているのは、上流階級と中間層だけである。それ以外の階層に関するガルヴェの考察の分析は、別稿を期したい<sup>60</sup>。

**謝辞** 本研究は科研費（21K01416）の助成を受けたものである。

## 参考文献

- Garve, Christian, Ueber die Moden, in: *Versuche über verschiedene Gegenstände aus der Moral, der Literatur und dem gesellschaftlichen Leben*, Tl.1, Wilhelm Gottlieb Korn, Breslau, 1792.
- Roth, Udo / Stiening, Gideon (Hrsg.), *Christian Garve (1742-1798): Philosoph und Philologe der Aufklärung*, Walter de Gruyter, Berlin / Boston, 2021.
- Simmel, Georg, Die Mode, in: *Philosophische Kultur. Gesammelte Essays*, Klinkhardt, Leipzig, 1911. (邦訳: 「流行」(円子修平訳)『ジンメル著作集7:文化の哲学』、白水社、1994年)
- Sombart, Werner, *Wirtschaft und die Mode*, Wiesbaden, J. F. Bergmann, 1902.

<sup>59</sup> ebd., S. 292.

<sup>60</sup> 貧民に目を向けたガルヴェの『貧困論』(1785年)に関しては、以下の論考で分析した。大塚雄太「第16章:クリスティアン・ガルヴェの貧困論—文明化のなかの貧困と人間」『野蛮と啓蒙—経済思想史からの接近』(田中秀夫編)、京都大学学術出版会、2014年、521-550頁。

- Tarde, Jean-Gabriel, *Les lois de l'imitation: étude sociologique*, Paris, Félix Alcan, 1890. (邦訳:『模倣の法則』(池田祥英・村澤真保呂訳)、河出書房新社、2016年)
- Veblen, Thorstein Bunde, *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study of Institutions*, Macmillan, London, 1912. (邦訳:『有閑階級の理論』(村井章子訳)、ちくま学芸文庫、2016年)
- 阿部勘一「消費社会の普遍性と「消費社会論」」『成城大学経済研究』197号、2012年。
- 池田成一「ガルヴェ『流行論』とヘーゲル市民社会論の成立」『東北哲学会年報』第9巻、1993年。
- 石川弘義「流行理論の系譜(第9章)」『講座現代の社会とコミュニケーション5—情報と生活』(内川芳美ほか編)、東京大学出版会、1977年。
- 稲上毅『ヴェブレンとその時代—いかに生き、いかに思索したか』、新曜社、2013年。
- 井上俊・伊藤公雄(編)『メディア・情報・消費社会(社会学ベーシック第6巻)』、世界思想社、2011年。
- 大塚雄太「クリスティアン・ガルヴェにおける人間・社会・モラル—「流行論」にみる現実的人間と通俗哲学の可能性」『社会思想史研究』第32号、2008年。
- 「第16章:クリスティアン・ガルヴェの貧困論—文明化のなかの貧困と人間」『野蛮と啓蒙—経済思想史からの接近』(田中秀夫編)、京都大学学術出版会、2014年。
- 坂井素思「贅沢消費論:ジンメルとヴェブレン消費理論の趣味論的解釈」『放送大学研究年報』16巻、1999年。
- ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』(今村仁司・塚原史訳)、紀伊國屋書店、2010年。
- 大黒弘慈『模倣と権力の経済学—貨幣の価値を変えよ(思想史篇)』、岩波書店、2015年。
- 高哲男『ヴェブレン研究—進化論的経済学の世界—』、ミネルヴァ書房、1994年。
- 玉田敦子「「啓蒙」と「熱狂」:フランスにおける「趣味判断」の由来と近代性」『人文学部研究論集(中部大学)』29巻、2013年。
- 中島純一『メディアと流行の心理(増補改訂版)』、金子書房、2013年。